

遠隔での研究支援における週一チャットの役割

中京大学通信制大学院 メンター 上谷佳誉

kayo@crest.sccs.chukyo-u.ac.jp

1. はじめに

通信制による教育の場では、学生と教師、または学生同士でのコミュニケーションをどう取るかが課題となる。本研究は、2学年合わせて15人前後の少人数制の通信制大学院で、週に1度チャットによる直接的なコミュニケーションの機会を設けた場合、研究を進める上で、動機付けになるだけでなく、事前に資料を共有しておくことが、より有効なコミュニケーションを引き出していることを示す。

2. 活動内容

中京大学通信制大学院認知科学専攻では、講義や研究を学生と教師間でのやり取りだけではなく、学生とメンターと呼ばれる学習支援者、学生同士など、互いの知識や技術を持ち寄り協調していくことで進めていく。協調の場を支える道具として、掲示板、メーリングリスト、チャットなどが用意されている。

今回は、自分たちの研究について活発に議論が行われる、認知科学会申込用アブストラクトを作成する際の、チャットと掲示板の利用のされ方を、ログデータを基に比較し、研究を進める上でのチャットの有効な利用法を検討する。

2-1 . チャットによる電子ゼミ

本院では、直接的なコミュニケーションの機会として、毎週金曜日夜10時から1時間程度チャットによる電子ゼミを設けている。毎週担当を決め、担当者が持ち込んだテーマについて、もしくは担当者の研究や論文作成について話し合いを行う。2004年度は年間42回行われた。テーマは「スクーリングの感想」など行事に関連したもの、「IT利用の教育支援」など自分の研究に関連したもの、「前期授業の振り返り」など授業に関連したもの、「なぜBlogが流行ったのか」など一般的なものまで様々である。

今回の分析対象である1月14日から2月28日までの電子ゼミでは、毎週1~2人の担当を決め、2つの「部屋」に分かれて、各担当者の認知科学会申込用アブストラクトについて話し合いを行うというもので、各部屋合わせて11回行われた。

この期間の参加者は、教師2名、メンター3名、学生8名である。

2-2 . 掲示板上での活動

チャットによる電子ゼミと並行して、掲示板上でも認知科学会申込用アブストラクトの作成が進められた。掲示板には、各授業についてレポート提出や議論を行う「授業板」のほか、自分の研究についての書き込みを行う「研究板」、毎週自分の活動を振り返り、記録を残しておく「振り返り板」、認知科学会用のアブストラクトや論文作成のための書き込みを行う「認知科学会板」が用意されている。

今回分析対象とするのは、「研究板」「振り返り板」「認知科学会板」の中の認知科学会申込用アブストラクトに関する書き込みが行われた記事である。

2-3 . 電子ゼミに関するアンケート

学生に対して行った電子ゼミに関するアンケートでは、「研究を続ける動機づけになる」「様々な人の意見が聞けてよい」などの肯定的な意見が多かった一方、「事前にテーマに関する資料を見てもおかないと、話についていけない」などの意見もあった。

3. 分析結果

3-1 .チャットと掲示板でのコメントの比較

分析対象期間の電子ゼミでは、挨拶や雑談を省いた研究に関する発言数が1196回あり、そのうち、担当者の発言数は488回、担当者以外の発言(コメント)数は708回であった。それに対して、対象となる掲示板の書き込み数は260回あり、そのうち、担当者の書き込み数は186回、コメント数は74回であった。担当者とコメントの割合を図1に示す。また、コメントの中で教師、メンター、学生それぞれが占める割合を図2に示す。

図1を見ると、コメントの割合は、掲示板では全記事数に対して、28.5%と30%程度であるが、チャットでは全発言数に対して59.2%と、60%近くを占めていることがわかる。

また、図2から、掲示板では教師やメンターからのコメントが71.6%を占め、ほとんどが指導者の立場からのコメントとなっているのに対し、チャットでは学生のコメントの割合が52.3%となっており、学生同士のやり取りの場となっていることがわかる。

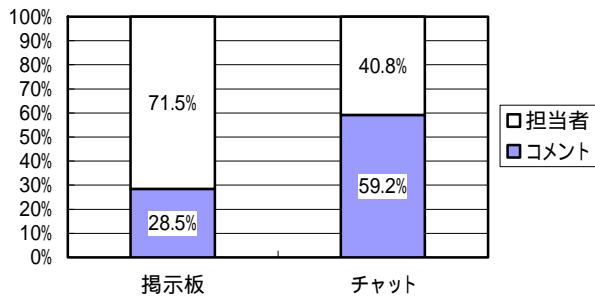


図1 担当者以外の「コメント」の割合

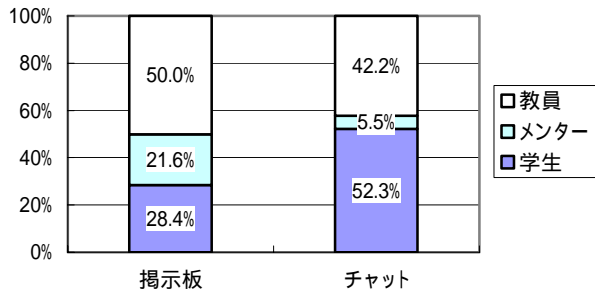


図2 コメント作成者の割合

さらに、誰かのコメントに対して、さらに誰かがコメントをつけるという3人以上の相互作用が起きている箇所を数えたところ(表1参照) 掲示板では全体で3回しか見られなかったが、チャットでは1担当者につき5~10回程度見られた。このことから、学生にとって、掲示板に書き込むよりもチャットの方がコメントしやすだけでなく、複数人での相互作用が起きやすくなっていることがわかった。

表1 複数人のインタラクションが起きている例

A	専門家の協同作業の難しさという話でしょうか?
B	うーん、本当はだからこそ共同作業が大事...と言う話にしたい...かな。
C	クライアントとの共同作業も?
B	はい、クライアントも含まれます。
A	クライアントまで含めると難しいですね。その背景まで関係してくる。

3-2 . 資料参照とチャットでの発言の関係

表2 事前資料参照とコメントのありなし

資料参照	チャットコメント		参加のべ	人 (%)
	あり	なし		
あり	34(82.9)	4(22.8)	41	
なし	7(17.1)	5(71.4)		

期間内に行われたチャット 11 回中掲示板に事前に資料が挙げられたのは 10 回。参加人数はのべ 41 人で、そのうち、事前に資料を参照した参加者は 34 人であり、82.9%に当たる。参照した参加者 34 人のうち、何らかのコメントを行った参加者は 30 人(88.2%)であり、事前に資料を参照しなかった参加者 7 人のうち、何らかのコメントを行った参加者は 2 人(28.6%)に過ぎなかった。また、事前に資料が挙げられなかったチャットでは、学生からのコメントは得られず、終始教師やメンターとのやりとりしか起こらなかった。

電子ゼミに関するアンケート で学生自身も感じているように、チャットでコメントをするには、事前に資料を上げ、それに目を通す活動が必要である。しかし、その活動が負担になっているという受け止め方もできるので、今よりやりやすくなるような支援方法の検討が必要であると考えられる。

3-3 . コメントの種類

チャットでは、「 とは何ですか」のような内容についての質問や情報の提供、分析方法の提案などのコメントが多く見られたのに対して、掲示板では「どうしてこのような結論が導き出されたのか」などの理由を問うような質問や、表現の仕方、論文の構成についてのコメントが多く見られた。

コメントの分類については、今後詳細に分析していく必要があるが、チャットではアイデアを広げるようなコメントが多く見られ、掲示板ではアイデアをまとめていくような発言が見られるなどの特徴が示唆された。

4 . 考察

2-3 .電子ゼミに関するアンケート や、金曜日に「振り返り板」に書き込まれることが多いことから、電子ゼミを定期的に行うことが、自分の活動や研究を振り返る良い機会になっており、そのことが研究を続ける動機付けになっていると考えられる。

また、チャットでは、複数人でのインタラクションが起きやすくなった。様々な分野で働く専門化同士が参加する電子ゼミでは、他方向からの情報の提供、意見、提案などが得られ、アイデアを膨らませることが可能になっていると考えられる。

しかし、発言するためには、事前にある程度知識を共有しておくことが必要であることや、チャットで広がったアイデアを掲示板でまとめるという活動が、研究を進める上で有効に働くことが示唆されたことから、今後はそれぞれのシステムの特性を活かした、総合的な支援方法を考えていきたい。